

第 15 回 サテライト・サービス番組審議会議事録概要

1. 開催日時

令和 2 年 8 月 28 日開催予定であったが新型コロナウイルス感染拡大予防の為、審議は文章による意見交換で行なった。

2. 参加者

委員長: 吉岡忍

委員: 竹中尚人、渡邊健一、池田哲雄、升本喜郎、砂川浩慶、宮崎美紀子、笹田佳宏

株式会社サテライト・サービス: 加藤浩輔、岡崎洋三、福本洋、藤沼聡

株式会社フジテレビジョン: 永竹里早、門澤清太

CJ ENM Japan 株式会社: 三澤法夫、李東首

3. 議題

1) 『半分の半分 ～声で繋がる愛～』 第1話 Mnet で放送

2) 『実話怪談倶楽部』 第 34 話 フジテレビ ONE/TWO/NEXT で放送

議題番組について各委員から次のような意見が出された。

1) 『半分の半分 ～声で繋がる愛～』 第1話

- ・ 日常にトラウマや記憶としての過去の出来事が侵入し現代が動き出す、韓流ドラマの類型の一つ。この様な「夢の国」としての過去を物語の起点とする韓国制作者の発想法は、現代韓国の何を反映しているのかに興味を湧いた。
- ・ 日本ドラマとも親和性がありそうな、台詞の少ない文学的なドラマで個人的には楽しめた。ただ韓国ではあまり評判がよくなかったと聞き、日本の視聴者の反応が気になる。
- ・ 照明やカメラワークが丁寧で綺麗な絵作りの印象を持った。
- ・ 詩の様なドラマで、性別年齢を問わず感情移入ができそうである。伏線が多くて初見ではわからない部分が多く、次回への期待感がある。
- ・ 丁寧に作り込まれた映像、音響、照明が秀逸、韓国ドラマのレベルの高さを感じた。
- ・ 物語のキーになる女性のキャスティングが疑問。声がドラマの重要なテーマなので、もう少し声に特徴のある女優がよかった。

- ・ テンポが遅くて魅力を感じず期待外れだった。映像とキャスティングはいいが脚本が今一つで、テーマが「片思いの純愛」なのか「心の傷からの再生」なのか焦点がはっきりしていない。
- ・ テンポが遅く2時間くらいの映画で完結できるのではないかと感じた。ただAIとクラシック音楽との対比で物語が展開するところは興味深く、現代的でありながら普遍的な「ラブストーリー」を表現する今の時代感が溢れていた。
- ・ NTFILIX で流行っているスピード感やアクション重視の韓流ドラマと異なり、「冬ソナ」のような情緒的で心地よい懐かしい伝統的な韓流スタイル。主演のチョ・ヘインの魅力を優先した、理屈ではなく気分優先のストーリー展開も見事。一服の清涼剤となるドラマ。

※委員からの意見に対し制作サイドから(CJ ENM Japan 三澤法夫)

質問:なぜこのドラマを編成したのか?

回答:まずは“最強の年下男子”としてブレイク中のチョン・ヘイン出演作で、彼の新しい魅力を感じることができる点。次に片思いを描いた切ないラブストーリーという点。近年、韓国ではサスペンスや不倫もの等刺激の強い作品が増えていますが、本作は落ち着いた雰囲気、胸が締め付けられるような切ない恋を余韻が残るような形で表現しています。それが日本の視聴者にマッチするのでは、と考え編成を決めました。

質問:日本での視聴者の反応は?

回答:調査中の段階ですが SNS 等の反応では、「世界観が好き」「温かい気持ちになる」「腑に落ちない部分もある」「切なさにとハマりする」「余韻がすごい」「キュンキュンする」「涙が出て心に染みる」「見始めたけどしんどい」「穏やかな流れで癒される」など様々で、好みが分かれるようです。

質問:なぜ韓国では視聴率が低迷し話数縮小になったのか?

回答:韓国制作陣は「作品のスピード感を高めるため、視聴者の期待に応えるため」と発表しています。近年の韓国ドラマは展開が速く刺激的な内容を売りにする作品が増えていて、その様な内容を期待した韓国の視聴者にはハマらなかったのだと考えます。

質問:韓流ドラマを放送するチャンネルが多い中、Mnet の編成上のポイント(戦略)は?

回答:トレンドに沿った最新作を放送することにポイントを置いています。韓流ドラマを視聴する40-50代女性を中心にアプローチしています。また、K-POPにも力を入れており、音楽番組の生放送やアイドル誕生を追うサバイバル番組など日韓同時放送で進行し最短で字幕制作を行うなど、新鮮なコンテンツをお届けしています。

2) 『実話怪談倶楽部』第34話

- ・ 「語り」の面白さがある。スマホやSNSでのデジタル言語が隆盛する一方で、講談師(神田伯山

等)が人気になる等「語り芸」への関心は高まっている。番組に登場する語り手は技巧的ではないがぎこちなさや素人っぽさに味がある。日常語としての日本語での語りの面白さを高めることができるのかが、この番組の大事なところだと思う。

- ・ MC の仕込み不足、審査員アイドルのワンパターンなリアクションに改善の余地あり。
- ・ 新しい怪談番組を作ろうとする意欲は感じるが、あまり怖くはない。語り手の話術の問題ではなく、我々現代人の聞き手としての想像力欠如が理由かもしれない。ロケやラーメン企画など情報過多で怪談に集中できないとも感じたが、それが新しい怪談番組の形なのかもしれない。
- ・ 審査員アイドルを、番組を面白くする装置としてうまく使っている。
- ・ MC 兵頭大樹や語り手3名も味があり面白かった。ただ、「おじさんが若い女の子(審査員アイドル)に嫌がることをして喜ぶ」図式にも見え、気持ちよくなかった。
- ・ 怪談話自体は、聞く側の個人差はあるとは思いますが、怖さは感じなかった。
- ・ 徐々に話が怖くなる作りはうまく、怪談後の MC とアイドルとのやり取りでより物語性を持たせ、番組のエンタテイメント性を高めていた。
- ・ 怪談の内容で、“実話”と言いつつ話を「作っている」と思わせる点がいくつかあった。
- ・ 全国怪談行脚コーナーでラーメン企画を盛り込むのは、番組の雰囲気とそぐわない。
- ・ 怪談話を聞いた審査員アイドルの不安感や驚愕度等を、機器で数値化し順位を決める演出がよかった。
- ・ 話は面白かったがストーリーが「想定範囲内」だった。話だけでは(心霊写真等)映像化されたものには敵わない。ロケも期待外れだった。幽霊やお化けよりも、人間の方がずっと怖く進化していると思う。
- ・ 期待したほど怖くも楽しくもなく番組の方向性がよくわからない。怪談は語り継がれた「おどろおどろしい話」をアレンジし継承していく文化。「怖がらせてなんぼ」に集中すべきだと思う。ラーメン企画は CS フジらしい企画で、ありだと思った。
- ・ “実話”と銘打ったことでただ怖がらせるだけではなく、リアリティ感が増してよかった。怪談話に VTR 企画やラーメン企画も上手く織り交ぜる全体構成も巧みだった。
- ・ 審査方法に関して、一人ではなくリアクションのバリエーションが豊富になる複数審査員の方がよく、審査基準にしていた心拍数等の数値も公表した方が視聴者の納得感は増したはず。

※委員からの意見に対し制作サイドから(フジテレビジョン 門澤清太)

質問:もちろん語り手の主観によるのだろうが、タイトルに“実話”を銘打っている以上、番組として怪談が“実話”であるかの検証を行っているのか?

回答:90年代に誕生した“実話怪談”というジャンルが既に視聴者からエンタテイメントとして受け入れられていると考えおり、実話としての検証はしていません。番組最後に「この番組は出演者や登場人物の記憶をもとに構成されており、場所、日時、人物に関して事実と異なる

る場合がございます」と記載することをご理解をいただけたと考えています。

質問:再放送もあるのに、意図的に生放送を強調(誕生日の件)した演出にしたのはなぜ?

回答:現在、配信等の実話怪談番組が増える中も生放送の番組は稀有なため、何が起るかわからない生放送のアドバンテージを活かしたいと考えました。

質問:なぜ全国怪談行脚コーナーにラーメン企画を盛り込んだのか?

回答:同チャンネルで放送中「ラーメンウォーカーTV」とのコラボですが、このコーナーを置くことで視聴者が怖い気持ちを一瞬リセットできる、いわば一服の清涼剤になればと考えました。

質問:番組の方向性がわからなかったが、どんなターゲットに向けて制作をしているのか?

回答:空前の実話怪談ブームの中、ホラー好きはもちろん小さな子供を除く全ての視聴者がターゲットです。

4. 次回予定

次回は令和2年11月中の開催を予定。議題対象番組は調整中。